

## 『天路逆程』に登場するヴァーチューの役割

櫻井 直美

日本大学大学院総合社会情報研究科

### The Role of Vertue in *The Pilgrim's Regress*

SAKURAI Naomi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

C. S. Lewis is well known as the author of *The Chronicles of Narnia*. He also wrote, as a Christian apologist, *Mere Christianity* which is considered to be the most convincing defense of Christianity in the 20th century. Although C. S. Lewis was a popular Christian apologist, his path to Christianity was a long one with many twists and turns. His intellectual progress was from realism to idealism; from idealism to pantheism; from pantheism to theism; and from theism to Christianity.

*The Pilgrim's Regress* is the first work that Lewis published after he accepted Christianity. He describes his path to Christianity in an allegorical way so that we can see the unmistakable struggles in his mind. A young man named Vertue, who represents a man who has established his own disciplined standards and tells God to let him alone, appears as soon as John has lost his religious belief. He keeps reappearing throughout the story. Through a detailed analysis of Vertue, I have found that for Lewis the moral norm is based upon "mere Christianity".

---

#### 1.はじめに

C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) はベルファスト生まれのイギリスの中世・ルネサンス学者、ファンタジー作家、文学批評家、キリスト教弁証家として知られている。著作は物語、詩集、神学・倫理論文集、文明批評など多岐にわたり、とりわけ『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-56) 全7巻は世界中で広く親しまれている。

ルイスの作品群には様々なキリスト教に関わるテーマが盛り込まれているが、彼自身のキリスト教との関わりは平坦なものではなく、キリスト教の棄教、現実主義(Popular realism)、哲学的な観念論(Philosophical Idealism)、汎神論(Pantheism)、有神論(Theism)を経て1931年、32歳の時に回心に至るという特異な経緯を持つ。彼は、キリスト教を棄て長年キリスト教に反駁した後に再び受け入れたキリスト教を〈混じり気のないキリスト教 [mere Christianity]〉と呼ぶ。それは宗派を超え、教会史上

において正統とされた教義を基盤とするキリスト教のことである。ルイスは生涯をかけ様々な文学形式による作品を通して、〈混じり気のないキリスト教〉を基盤とするヴィジョンを提示してきた。その第一作目となるのが『天路逆程』<sup>1</sup>(*The Pilgrim's Regress*, 1933)であり、ルイスが紆余曲折を経てようやくキリスト教を再受容した後、初めて発表した作品である。『天路逆程』は、ルイスの思想遍歴が夢物語としてアレゴリー形式で語られており、ルイスのキリスト教に対する反駁の歴史、そして遂にキリスト教を再受容する過程がアレゴリー全体を通して提示されて

---

<sup>1</sup> *The Pilgrim's Regress* は明らかにジョン・バニヤンの *The Pilgrim's Progress* を意識して書かれたものである。*The Pilgrim's Progress* の邦訳が『天路歷程』とされていることから本論考では *The Pilgrim's Regress* を『天路逆程』とする。『天路退行』、もしくは『天路逆行』とする先行研究者もいるが、旅に出た主人公が〈憧れ〉の対象を求めて故郷に戻ることから本論考では『天路逆程』を使用する。

いる。当該作品には様々な思想を表象する多くの人物が登場する。本論考では、『天路逆程』の主人公ジョン(John)の旅の道連れであるヴァーチャー(Virtue)<sup>2</sup>に焦点を当て、ルイスの説く〈混じり気のないキリスト教〉のテーマを考察したい。ヴァーチャーは物語を通して消えては再び現れ、最後にはジョンと共に神のもとに辿りつく。ヴァーチャーのその名が持つ意味〈徳行〉にルイスの主張がどのように盛り込まれているのかを検証する。

## 2. 『天路逆程』

ルイスはキリスト教を棄教した後、はっきりと自身でも説明のつかない〈何かに対する憧れ〉を希求した。1931年9月、その〈憧れ〉の源泉がキリスト教の神であるとの考えに辿り着いたルイスは再びキリスト教を受け入れた。『天路逆程』はルイスのキリスト教再受容の一年後1932年8月に友人アーサー・グリーブス(Greeves, Joseph Arthur, 1895-1966)とアイルランドで過ごした2週間の休暇中に書かれた作品である。同時期ルイスは『愛のアレゴリー』(*The Allegory of Love*, 1936年5月)という学術書を執筆していた。『愛のアレゴリー』は1928年から書き始め、一年に約一章を書き進めてようやく1936年に出版された作品である。『天路逆程』は、アレゴリーという文学様式の研究に取り組んでいたルイスが、自身のキリスト教への回帰をアレゴリーを用いて一気に書き上げた作品である。そこにはルイスの〈何かに対する憧れ〉が〈憧れの島〉として設定されている。

なお、『天路逆程』発表の10年後にルイスは序文と章ごとにアレゴリーの説明を追記している。ルイスは、追記はアレゴリー作品を台無しにする可能性があり不本意なことだが、不明瞭で難解なアレゴリーの使用が作品理解を困難にし、また多くの誤解を生じることを懸念しての妥協策だったと序文に記している<sup>3</sup>。

『天路逆程』は、明らかにジョン・バニヤン(John Bunyan, 1628-1688)の『天路歷程』(*The Pilgrim's*

*Progress*, 1678)を意識して書かれたものである。『天路歷程』は、主人公のクリスチャン(Christian)が天の都に辿りつくまでの旅の中でキリスト教徒の宗教生活の範例が示されている。つまりキリスト教を受け入れた者を対象として書かれたものである。一方、『天路逆程』の主人公ジョン(John)は『天路歷程』の終着点である天の都の麓にあるピューリタニアの国から旅を始める。旅先でさまざまな思想や観念を持つ人々に出会い、最後には生まれ故郷の神のもとに辿り着く形式を取っている。両作品とも夢の中の出来事として描かれている。

『天路逆程』にはルイス自ら描いた地図が収められており、彼の遍歴の跡を辿るうえで興味深い。地図の中央に南北を分断する真直ぐな道が描かれており、これを本道(Main Road)としてジョンの旅が続けられる。ジョンは故郷ピューリタニアから大溪谷まで通じるその本道を北方や南方に外れながら、憧れの島を求めて探索する。

## 3. プロット

夢物語はつぎのように始まる―「私はピューリタニアの国で生まれたある少年の夢を見た。その子の名前はジョンという」。彼は幼い頃の或る日に、家の料理人から守らなければならない規則があるということ教えられた。その一年後、ある陰鬱な寒い朝、ジョンは両親に連れられてその地区のスチュワード(Steward)<sup>4</sup>の所へ行った。そこでスチュワードに教えられた話を聞いてジョンは困惑する。ランドロード(Landlord)<sup>5</sup>は愛深き人であると同時に、規則を破った者を蛇やサソリの蔓延るブラック・ホール(Black hole)<sup>6</sup>へ投げ込む人であると教えられたからである。その後しばらく時が経過したある日のこと、ジョンは家から遠く離れた道で美しい音楽を耳にし、時おり遠くに穏やかな海と魅惑的な島を見る。その島への憧れが日に日に募り、とうとうその島を探し求める旅に出る。

ジョンは南北を分断する真っ直ぐ西へ延びる本道

<sup>2</sup> 徳行の意 Virtue。14世紀のスペリング使用。

<sup>3</sup> C. S. Lewis. *The Pilgrim's Regress*, Collins, 1987, preface to third edition, p19. 以下本作品からの引用はページ数を記す。

<sup>4</sup> 聖職者を表す。

<sup>5</sup> キリスト教の神を表す。

<sup>6</sup> 地獄を表す。

(Main Road)を歩き始めた。最初に出会うのは 19 世紀の理性主義者のエンライトウンメント氏(Mr. Enlightenment)である。彼は現実社会や科学について話し、ランドロードやブラック・ホールはスチュワードの作り話で存在しないとジョンに説明する。それを聞いたジョンは安堵と喜びで晴れ晴れとした気持ちになる。

次にジョンが出会ったのは、旅の道連れとなるヴァーチュエ(Vertue)である。彼はこれといった目的もなく毎日西へ 30 マイル進むという自身に課した規則を忠実に守っている。二人はしばらく南北を分断する本道を西へ向かっていたが、ジョンはヴァーチュエと別れて南のスリル(Thrill)の街に立ち寄る。

その後、ジョンは本道を横切り北に向かい、感情的で陳腐な詩や芸術に陶酔するクレバーズ(Clevers)、体内を透視するジャイアント(Giant)に惑わされるが、ジャイアントから救い出してくれた凛々しいリーズン(Reason)に出会いようやく本道に戻る。

憧れの島を見つけられずに本道に戻ったジョンはヴァーチュエに再会する。ヴァーチュエはジョンと別れた後も自身に課した苦行を遂行するべく、本道の険しい道のりをただひたすら西に向かって進んでいた。しかし本道を進む二人の旅は大渓谷に阻まれる。そこにいた老婦人マザー・カーク(Mother Kirk)<sup>7</sup>はこの渓谷の由来を語り、憧れの島を見つけないのなら彼女の助けを得て渓谷を渡るように告げる。ジョンとヴァーチュエはその申し出を断り自分たちで渓谷を渡る道を求めて旅を続ける。北に向かった二人はペール・メン(Pale Men)と呼ばれる三人の兄弟に出会う。彼らは禁欲的で非現実的な抽象論に酔うばかりで、憧れの島などないと言う。その後、二人は南へ向かい、訪ねたブロード氏(Mr. Broad)は実に愛想がよいが、ジョンの憧れの島については詭弁を弄し、曖昧な答えをするばかりでジョンは失望する。さらに南のウィズダム氏(Mr. Wisdom)の話聞いた後、ジョンとヴァーチュエは離れ離れになってしまう。

ジョンは暗闇の中で会った或る男(A Man)や洞穴に住むヒストリー氏(Mr. History)の話を聞いてマザ

ー・カークのもとへと向かう。そこには一足先にヴァーチュエが辿りついていて、マザー・カークは二人に身に付けているボロ服を脱ぎ捨て、裸で谷底の泉を泳いで渡ることを命ずる。対岸に泳ぎ着いたジョンは憧れの島を目の当たりにする。それは想像を絶する美しさで、なんと憧れの島は彼の生まれ故郷ピューリタニアの東の山であった。心の満たされたジョンとヴァーチュエはガイド(The Guide)に導かれて帰途に着くが、戻り道は別世界のように輝き、歓びに包まれていた。ジョンの島に対する憧れは実はランドロードへの憧れであったが、彼はそれを知らずに暗中模索していたことが分かる。ジョンとヴァーチュエは楽しげに歌を歌いながら川を渡り、故郷のランドロードの御許に辿り着く。そして物語の語り手である私は夢から覚める。

## 4. ジョン(John)とヴァーチュエ(Vertue)

### 4.1 二人の出会い

憧れの島を求めて故郷のピューリタニアを後にしたジョンはエンライトウンメント氏に出会う。勿体ぶった話しぶりをするエンライトウンメント氏は帰納法により、進化論、比較宗教、科学を根拠として宗教を排除する。ランドロードやブラック・ホールなど存在しないと告げられたジョンは、安堵と喜びで胸が一杯になる。ジョンと同じように、ルイスは、神への祈りに疲れ果て、キリスト教を棄教した時のことを自伝的作品『喜びのおとずれ』(Surprised by Joy, 1955)に次のように記している。「自分を精神的に鍛錬するための信仰上の務めを、その頃わたしはすでに耐えがたい重荷と考えるようになっていた…ただ意志の力だけを使って、意志の力ではつくり出せないようなものを生み出すことが夜の課業になった」<sup>8</sup>。そしてキリスト教を棄てた後、ルイスはほっとした気分になったと記している。

エンライトウンメント氏と別れたジョンは晴れやかな面持ちでヤーウェ・イルエ(Jehovah-Jirah)<sup>9</sup>とい

<sup>8</sup> C. S. ルイス、『喜びのおとずれ』、早乙女忠 中村邦生訳、ちくま文庫、2005 年、85-6 ページ。

<sup>9</sup> ヘブライ語で「主は備えてくださる」の意。『聖書』創世記 22 : 14、新共同訳、以下聖書からの引用は同書からとする。

<sup>7</sup> 教会を表す。

う丘の上を歩いていた。そこで出会ったのが、ジョンと同年代の青年ヴァーチャーである。ヤーウェ・イルエは「創世記」においてアブラハムが息子イサクを神に献げようとしたまさにその瞬間、御使いが示した木の茂みにイサクの代わりの焼き尽くす献げ物が備えられていた場所である。ジョンの心からランドロードが姿を消した途端、この場所にヴァーチャーが登場することは大きな意味が含まれている。何故なら、ジョンの憧れの希求が正しくランドロードへと導かれるために、ヴァーチャーの存在が重要な役割を担うということが後に判明するからである。ルイスがキリスト教を棄教した一時期に、自立を尊び神を干渉者とみなしたように、ヴァーチャーも干渉をひどく嫌う。ヴァーチャーはこれといった目的もなく毎日西へ 30 マイル進むという自身に課した規律を忠実に守り、自分の魂が独立していることをとても誇りに思っている。ジョンがヴァーチャーにランドロードのことを尋ねると、ランドロードのことは聞いた事があるが誰にも干渉されたくないと言う。

‘You don’t believe in the Landlord, do you?’

‘I know nothing about him—except by hearsay like the rest of us.’

‘You wouldn’t like to be under his thumb.’

‘Wouldn’t like? I wouldn’t be under anyone’s thumb.’ (53)

さらにヴァーチャーは干渉されるくらいなら自ら地獄へ行った方がましだと言う。

‘I’d let him put me in the black hole sooner than take orders if the orders were not to my mind.’ (53)

しばらく二人は本道を西へと進む。その後、二人は魅力的な女性メディア・ハーフウェイズ(Media Halfways)に出会い自宅へ招かれる。ジョンが招待を受けたにも関わらず、ヴァーチャーはそれを断り、自身に課した規律を遂行するためにジョンと別れて一人本道を進む。

‘Certainly not,’ said Vertue. ‘We must keep to the road. We must keep on.’

‘I don’t see why,’ said John,

‘I dare say you don’t,’ said Vertue. (55)

このようにヴァーチャーは、ジョンが憧れの島を希求するのとは対照的に、自身が自由に選択できる者であることを誇る。この後、ヴァーチャーはジョンの前から姿を消しては再び現れることを繰り返し、ジョンの〈希求〉に対するもう一つの世界、〈選択〉を提示している<sup>10</sup>。ルイスはキリスト教宗教著作集の一つ『痛みの問題』(*The Problem of Pain*, 1940)において、「人間は神に与えられた自由意志により、その生を終えるまで選択の連続であるが、それが神の意思を一貫して無視するような選択である場合は、その選択にどんな苦行が伴おうが救われない」<sup>11</sup>と記している。さらに、ルイスは「一つの行為の価値をその不快感によって測る（不快感が増すほど価値がある）道徳的価値におけるカント的な考えに反駁し、道徳的価値は神への服従無くしては無に帰す」<sup>12</sup>と述べている。ヴァーチャーはまさにカント的な考えに則って苦行を遂行する青年である。

## 4.2 再会

ジョンが南方や北方に寄り道をした後に本道へ戻るとヴァーチャーがとぼとぼ歩いていた。ジョンと別れた後もヴァーチャーは本道をひたすら歩き続けていた。その道は山を迂回することなくまっすぐであるために、大変厳しい道のりであった。彼は一日に 10 マイルさえ進むのが困難な日もあったが、目的地がないので急ぐ必要がなく、険しい道を歩き続けることから得るものもあったという。

‘The main road took them without a bend,’ said Vertue. ‘And I often made scarcely ten mails a day. But that does not signify: I have learned something

<sup>10</sup> Clyde S. Kilby, *The Christian World of C. S. Lewis*, Wm. B. Eerdmans, 1964, p.30.

<sup>11</sup> C. S. ルイス、『痛みの問題』、中村妙子訳、新教出版社、1995 年、2-3 章参照。

<sup>12</sup> 同上。

of climbing and sweated off a good deal of soft flesh. ...' (98)

まもなく二人の行く手は、突然道が途絶えており、7マイルの幅の大溪谷が広がる断崖絶壁になっていた。ヴァーチャーは崖を下りて溪谷を渡ろうと提案した。無謀だと押しとどめるジョンにヴァーチャーはそれが自分の規則だからと言い張る。

‘... It would be in accordance with the rule.’

‘What rule?’

‘The rule is,’ said Vertue, ‘that if we have one chance out of a hundred of surviving, we must attempt it: but if we have none, absolutely none, them it would be self-destruction, and we need not.’ (99)

そこにランドロードの義理の娘と名乗るマザー・カーク (Mother Kirk)<sup>13</sup>が現れて、二人を運んで溪谷を渡らせてあげると申し出る。ヴァーチャーはマザー・カークのことを知っていた。

‘Oh, It’s you, Mother Kirk, is it?’ said Vertue, and added in an undertone to John, ‘I have seen her about the cliffs more than once. Some of the country people say she is second-sighted, and some that she is crazy.’ (100)

マザー・カークはジョンとヴァーチャーに大溪谷 (Peccatum Adae)<sup>14</sup>の由来を語る。その話を聞いて、今度はジョンがマザー・カークに一縷の望みを託そうとするが、それに対してヴァーチャーは断固拒絶した。

‘I am afraid it is no use, mother,’ he said; ‘I cannot put myself under anyone’s orders. I must be the captain of my soul and the master of my fate. ...’ (105)

<sup>13</sup> 教会を表す。

<sup>14</sup> ラテン語で「アダムの罪」の意。

ヴァーチャーは誰かに干渉されることを極端に嫌う。ルイスもまた青年の頃、人から干渉されることを極端に嫌っていたことを次のように記している。「わたしは余計なことをされるよりも、放っておいてもらったほうがいいと思っている人間だった。だから人間関係では、わずかなことでも人から干渉されるのを嫌がっていた」<sup>15</sup>。このようにヴァーチャーにルイス自身の姿を重ね合わせることができるのである。

その後、キリスト教を再受容したルイスは、ヴァーチャーが行った意志を貫く苦行について次のような見解を示している。「苦行は神によって送られる苦難とはがちが違う。断食は偶然的に、または貧困から食事を抜くということと全く性質が違う。断食は食欲に逆らう意思の確認であり、それから得られる報いは、己に勝つことと危険な誇りだ。苦行自体は意思を強化するが、それは全人格を神に捧げる準備の一段階としてのみ有用だ。苦行は手段として必要なものであっても、それ自体目的となると、忌まわしいものになる」<sup>16</sup>。このルイスの見解に基づけば、ヴァーチャーは克己的な苦行により自己の魂を誇り、神からの離反を具現している青年であると言える。ジョンとヴァーチャーは自分たちの力で溪谷を渡る道を求めて北へ向かった。

#### 4.3 ヴァーチャーの両親

旅の途中でヴァーチャーの両親が明らかになる。ジョンとヴァーチャーは溪谷を渡る道を求めて北へ向かっていた。そこで荒れ果てた小屋に住むペール・メン (Pale Men) という三人の兄弟に出会った。彼らの名はネオ・アンギュラー氏 (Mr. Neo-Angular)、ネオ・クラシカル氏 (Mr. Neo-Classical)、ヒューマニスト氏 (Mr. Humanist) でそれぞれがロマン主義に対する憎悪によって固い絆で結ばれている。彼らの父はジョンがピューリタニアを後にした次の日に会ったエンライトウンメント氏だと言う。彼らはエンライトウンメント氏の二度目の妻、ユーフェイア

<sup>15</sup> C. S. ルイス、『喜びのおとずれ』、早乙女忠、中村邦生訳、ちくま文庫、2005年、156ページ。

<sup>16</sup> C. S. ルイス、『痛みの問題』、中村妙子訳、新教出版社、1995年、145ページ。

(Euphuia)との間に生まれた。ヴァーチャーは自身をペール・メンの母ユーフュイアが結婚前にもうけていた子供であると言う。

‘Then,’ cried Vertue, ‘we are—if you care to acknowledge the kinship. You have probably heard that Euphuia had a child before she married your father. I was that child—though I confess that I never discovered who my father was and enemies have hinted that I am a bastard.’ (126)

ヴァーチャーは、母の名前は知っているが、自分は私生児であり父親はわからないと言う。母の名ユーフュイアはギリシア語で〈資質の良さ〉を表す。ルイスの幼い頃病死した母フローラは牧師の娘であった。ヴァーチャーの母ユーフュイアはルイスのおぼろげな遠い記憶、「幸福を手にする才能に富んで」<sup>17</sup>いた母と符合する作中人物である。ヴァーチャーは体力の消耗しているジョンをペール・メンの小屋に残して溪谷を渡る道を求めて北の果てまで行く。溪谷を渡る道は見つからず、そこで見た恐ろしい光景やペール・メンに危機が迫っていることを伝えるために小屋に戻り、再びジョンと合流して二人は南へ向かった。

南のウィズダム氏を訪ねた後、ジョンとヴァーチャーは離れ離れになる。ジョンが出会った洞穴に住む仙人ヒストリー氏(Mr. History)の話によりヴァーチャーの父が明らかになる。

‘... I know him though he did not tell me, for I know his family; and his father, whom he does not know, was called Nomos and lived among the Shepherds. ...’ (196)

父の名はノモス<sup>18</sup> (Nomos)、律法という意味の羊

飼いの民の一員であった。羊飼いの民は文字を読むことができたので、ランドロードから絵ではなく規則を授かった。

‘... The Shepherds could read: that is the thing to remember about them. And because they could read, they had from the Landlord, not pictures but Rules.’ (195)

このようにヴァーチャーは規則から神を知る羊飼いの民の息子であった。さらにヴァーチャーが本道を進み続けたことを裏付けるように、羊飼いの民は本道を歩む運命にあるとヒストリー氏は告げる。

‘... Now the Shepherds, because they were under the Landlord, were made to begin at the right end. Their feet set on a road: and as the Landlord’s Son once said, if the feet have been put right the hands and the head will come right sooner or later. ...’ (195)

以上のように様々な出会いからヴァーチャーの素性が明らかになる。

#### 4.4 ジョンとヴァーチャーの迷い

これまでのところ、ヴァーチャーは自身に課した厳しい規律に沿って旅をしてきた。しかしペール・メンに別れを告げた後、ヴァーチャーは心の迷いを生じて重い口をジョンに開く。

‘... But I am beginning to find that it will not do. In the old days it was always a question of doing what I chose instead of what I wanted: but now I am beginning to be uncertain what it is I choose.’ (142)

ジョンはそんなヴァーチャーに次のように述べる。

‘Vertue,’ said John, ‘give in. For once yield to desire. Have done with your choosing. *Want* something.’ (144)

<sup>17</sup> C. S. ルイス、『喜びのおとずれ』、早乙女忠、中村邦生訳、ちくま文庫、2005年、10ページ。

<sup>18</sup> ノモスはギリシア語であり、ヘブライ語ではトーラーと言う。ユダヤ教徒はモーセによって与えられた神の啓示と戒めトーラーを信仰上の最も基本的かつ重要な拠所とした。

ヴァーチャーは自身の道徳主義だけでは満たされないことに気づく。一方ジョンも憧れの島を求め続ける旅に疲れ果てていた。

‘I think my heart will break,’ said John after they had gone many paces in silence. ‘I came out to find my Island. I am not high-minded like you, Vertue: it was never anything but sweet desire that led me. I have not smelled the air from that Island since — since — it is so long that I cannot remember. ...’ (143)

ジョンの憧れの希求、かたや道徳律を重んじるヴァーチャーはお互いに歩み寄ることが出来ずに心が離れてしまう。ルイスはこの章 (Book Seven Chapter 2) の冒頭にワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) の『序曲』 (*The Prelude*, 1779) の一節を引用している<sup>19</sup>。

‘Sick, wearied out with contrarities, he yields up moral questions in despair’ (145)

暗闇の中、ジョンはヴァーチャーを見失ってしまう。ジョンはヴァーチャーの名前を叫びながら、実はヴァーチャーの存在が幻影ではないかとの思いがよぎる。

So all that night he rummaged to and fro in the dark, calling out Vertue’s name: and often it came into his head that Vertue had been all along one of the phantoms of a dream and that he had followed a shade. (144)

まもなくジョンはヴァーチャーを発見するが、ヴァーチャーの目は見えなくなっていた。ヴァーチャーの目的のない、または希求を軽蔑する道徳主義は光が閉ざされて行き詰ってしまうのである。二人は本道を横切り南へ向かう。暖かな気候と十分な食べ

物を与えられ、まもなくヴァーチャーの目は癒えたが、ウィズダム氏のところで過ごした後、次の言葉を残して再びヴァーチャーは姿を消してしまう。

‘... You could not do the things I intend to do: and if you could, I would have none of you. Friendship — affection — what are these but the subtlest chains that tie us to our present country? ...’ (177)

#### 4.5 第三者の介入

ジョンはウィズダム氏の話聞いて自暴自棄になり切り立った岩山を登って行ったヴァーチャーの後を追った。しかし、ヴァーチャーを見失い諦めかけた時に或る男 (A Man) に会おう。或る男はジョンが崖を登るのに手を貸し、パンと水を与えて力づける。ジョンが或る男に会おう Book 8 Chapter 2 の注釈<sup>20</sup>に John would turn back. Christ forces him on. (178) とあるように、或る男はイエス・キリストを表わすことが明示されている。彼はジョンにヴァーチャーを追って二人一緒になければ回復の見込みはないと告げる。

‘No madder than you, and no saner,’ said the Man. ‘You will both recover if only you will keep together.’ (180)

ヴァーチャーと一緒になければ回復の見込みはないという言葉は重要な意味を含んでいる。何故なら、ジョンの憧れの島への希求にヴァーチャーの道徳が伴った時に初めて、神の救いが受けられるというメッセージが込められているからである。さらに、その後ジョンが出会ったヒストリー氏も二人は共にいなければならないことを告げる。ヒストリー氏によれば、ジョンは異教徒であり、ヴァーチャーは羊飼いの民であり、それぞれは半人間であるので全一的人間になるためにお互いに血縁関係を誓うことが必要であると言う。羊飼いの民の資質をヒストリー氏は次のように述べる。

<sup>19</sup> Kathryn Lindskoog, *Finding the Landlord*, Cornerstone Press Chicago, p.71.

<sup>20</sup> ルイスは不明瞭で曖昧なアレゴリーを明確にするために、作品発表 10 年後に各章に注釈を付けた。

‘They were narrow. The thing they had charge of was narrow: it was the Road. They found it. They sign-posted it. They kept it clear and repaired it. ...’ (196)

羊飼いの民は太古の昔から本道に道標をつける働きをしていた。このことはランドロードを見つける道標としてのヴァーチャーの働きを裏付けるものとなり、ジョンはヴァーチャーなくしてランドロードに辿り着けないことを示している。ジョンが相容れない二人の関係をヒストリーに告げると、二人の対立は二人の力だけでは解決することができないので三番目の人（イエス・キリスト）の力を借りなければならず、そのためにマザー・カークのところへ行くことを命ずる。

このことは『聖書』に記される、異教徒（何かに強い憧れを抱くジョン）とユダヤ人（律法に縛られるヴァーチャー）が融合して、一人の主イエス・キリストの下で一つの共同体を形成することの必要性を伝えるヨハネによる福音書の次の言葉を象徴している。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」<sup>21</sup>。ジョンがマザー・カークのところに辿り着くとそこにはヴァーチャーが待っていた。

#### 4.6 大溪谷を渡る

マザー・カークはジョンにボロを脱ぎ捨て泉に頭から飛び込むように告げる。ボロを脱ぎ頭から泉に飛び込む行為は自己放棄を意味する。ルイスは後に発表する数々の作品中に神への服従のための自己放棄に関するテーマを盛り込んでいる。自己を棄て、被造物として神にすべてを委ねた時に、人間は神にささげられた意志を通して、つまり人間の意志が真に神のものであるときにこそ、真に創造的なもの、真におのれ自身のものとなるというテーマである。これは「自分の命を救いたいと思う者は、それを失

うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである」<sup>22</sup>という聖句の意味であり、キリスト教の最高の真理、カルバリにおけるキリストにより完成されている。

ヴァーチャーはマザー・カークの命令に躊躇するジョンに言葉をかける。

‘It is only necessary,’ said Vertue, with a smile, ‘to abandon all efforts at self-preservation.’ (214)

これまで自身が決めた規律に沿って旅をし、魂の自立をなにより誇っていたヴァーチャーが自己保存のための一切の努力を放棄するようにジョンに告げるのだ。ジョンが今まで出会った人々の亡霊がジョンを引きとめようとする、ヴァーチャーは自ら泉に飛び込み、ジョンもそうするように促す。そしてとうとう二人は泉の反対側の岸に辿りつき大溪谷を渡る。その時二人は喜びに包まれ、ヴァーチャーは自負心をすっかり捨て去っていた。

... they went on their way singing and laughing like schoolboys. Vertue lost all his dignity, ... (247)

ガイドに導かれてジョンとヴァーチャーはともに死の小川を渡り、ランドロードの御許へとようやく辿りつく。

#### 5.結論

以上のことからジョンの旅の道連れヴァーチャーは『天路逆程』におけるもう一人の主人公であると言えよう。ルイスがキリスト教を再受容するまでの思想遍歴がジョンの逍遙と符合するのと同様に、ヴァーチャーの言動の中にもルイス自身が浮かび上がってくる。ジョンが憧れの島を求めてピューリタニアの国を後にしてランドロードを棄てた時に、厳しい規律を自身に課した羊飼いの民であるヴァーチャーが現れた。その場所は奇しくも「神が備えてくださる」という意味を持つヤーウェ・イルエの丘であった。ランドロードがジョンのために備えた旅の道

<sup>21</sup> 『聖書』、新共同訳、日本聖書協会、「ヨハネによる福音書」10:16。

<sup>22</sup> 同上、「ルカによる福音書」9:24。

連れであるヴァーチャーにはランドロードへの回帰のための本道を貫く徳行が備わっていた。しかしヴァーチャーの徳行は神を中心とするものではなく、克己心を誇るものであった。ジョンにとってヴァーチャーが必要であったと同様に、ヴァーチャーにとってもランドロードに辿りつくにはジョンの憧れの希求が必要であった。ヒストリー氏と共に半人間であると告げられた二人は、マザー・カークの助けを得て、ボロを脱ぎ捨て裸で泉に飛び込むことを課せられる。その行為は自己放棄を意味する。ルイスがキリスト教を棄て、再び受け入れた後の初めての作品である『天路逆程』には、後に発表される様々な作品に盛り込まれたテーマの源泉となるものが含まれている。その一つがジョンとヴァーチャーに具現されている自己放棄である。ジョンが憧れの島を求め、満たされぬ思いに胸を痛めるのと同様に、ヴァーチャーは自己を誇るための苦行から痛みを受け続ける。二人はアダムの罪を表象する大溪谷を自己放棄をすることにより渡り、ようやくその痛みから解放される。ルイスは、ヴァーチャーを通して自己を中心とする道德律はいかに痛みが伴おうとも決して実ることがなく、神を一貫して無視した苦行はヴァーチャーが光を失ったように行き詰まることを示している。一方ジョンにとっても憧れの希求だけではなく、ランドロードへの回帰を示す本道を貫くヴァーチャーという徳行が必要だった。泉の前で飛び込むことを躊躇ったジョンを後押ししたのはヴァーチャーであった。二人は共に神の御許へ辿りついたのだ。ジョンとヴァーチャーが共にいて、二人一緒に成し得たこの自己放棄こそルイスが生涯をかけて説き続けた〈混じり気のないキリスト教〉のテーマの一つである。『天路逆程』におけるヴァーチャーの役割を通してルイスのキリスト教に対する厳しい姿勢が示されている。

(Received:December 31,2010)

(Issued in internet Edition:February 8,2011)